

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 5 月 7 日現在

機関番号：21403

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12608

研究課題名(和文) 南方熊楠と明恵の 夢 に関するデータベースの作成と比較思想研究

研究課題名(英文) The Construction of the Database of the "Dreams" which Kumagusu Minakata and Myoe Had and the Comparative Studies of Their Thoughts

研究代表者

唐澤 太輔 (Karasawa, Taisuke)

秋田公立美術大学・大学院・准教授

研究者番号：90609017

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、南方熊楠(1867-1941)と明恵高弁(1173-1232)という、日本における二人の知的巨人の思想を 夢 と華厳思想を中心に比較考察するものである。まず南方熊楠の 夢 に関する記述を精査し、続いて華厳僧・明恵高弁が見た 夢 にどのような動物が登場したかを調べリスト化した。さらに、華厳思想が 夢 と深い関わりにあることを考察し、通常の時空間を超えた非-因果的連関すなわちシンクロニシティの背景にあるものを、両者の言説を比較しつつ研究を行なった。両者の 夢 と華厳思想を背景とした言説を抽出し、データベース構築の基礎を作ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、熊楠と明恵の 夢 の記録を精査することで、夢と現実の「境界」とはいかなるものかを哲学的に(あるいは存在論的に)論究することができた。併せて、二人の天才が記録した日記等を調査することで、人間における 夢 という現象の「意味」を考察することができた。特に、両者の背景にある華厳思想が 夢 と深い関わりにあることを考察し、またそれが通常の時空間を超えた非-因果的連関作用の深い考察に繋がること明らかにできたことは本研究成果の大きな意義の一つでもある。

研究成果の概要(英文)：This study compares and considers the ideas of two intellectual giants in Japan, Minakata Kumagusu (1867-1941) and Myoe Koben (1173-1232), focusing on "dreams" and Kegon thoughts. First, I reviewed the details of the description of Minakata's dreams, and then investigated and listed what kind of animals appeared in Myoe's dreams. Furthermore, considering that Kegon thought is deeply related to dreams, I studied what is behind the non-causal relationship, that is, "synchronicity," which transcends ordinary space and time, comparing the discourses of both statements. Through this study, I was able to extract the discourses against the background of both dreams and Kegon thoughts, and lay the foundation for "database" for them.

研究分野：哲学

キーワード：南方熊楠 明恵 夢 華厳思想 ユング シンクロニシティ 河合隼雄 粘菌

## 1. 研究開始当初の背景

博物学者・民俗学者・生物学者として知られる南方熊楠(1867~1941年)が「夢」という現象に非常に関心を持ち、深く研究を行っていたことは、本研究の代表者である唐澤(以下、筆者)のこれまでの調査研究(第1回南方熊楠研究奨励事業(2008年10月~2010年3月)およびその研究成果の一部でもある『南方熊楠の見た夢 パサーージュに立つ者』[唐澤2014])などによって明らかにされてきた。筆者は、上記研究において熊楠による「夢」の記述に関する「データベース」を作成した(南方熊楠顕彰館収蔵)。この研究において明らかになったことは、まず、熊楠が「やりあて」(偶然の域を超えた発見や発明、的中。熊楠の造語)と「夢」との関連に、非常に関心を示していたことである。そして、彼が「夢」を、生(この世)と死(あの世)の中間領域=「通路」として考えていたことである。さらに、上記研究によって、筆者は、熊楠の「夢」に関する考察が、彼の知の「体系」である「南方マンダラ」と密接に関連していることを明らかにした。熊楠は、「心」界と「物」界が交わる領域を「事不思議」と呼び、そこをいわゆる「現実世界」として捉えていた。また熊楠は、それよりさらに深層にある領域をも想定し、そこを「理不思議」と名付けた。そして彼は、その語を用いつつ、一般的な「夢」よりさらに深く、極めて根源的な場に近い領域についても考えようとしていた。「理不思議」は、予知や予感などと密接に関わる領域であり、彼はそこに立つことで「やりあて」も可能なのではないかと考えていた節がある。そして、「心」「物」「事」「理」の各「不思議」(領域)を包摂するものとして、熊楠は「大不思議」という生命そのもの=根源的な場を想定した。

筆者は、これらの研究を通じて、南方熊楠研究において今までにはなかった「熊楠と夢」という新たな研究領域を開拓してきた。しかし、それはまだまだ十分なものということではない。

そこには、華嚴思想の要素が抜け落ちていくからである。

筆者の上記以降の研究によって、熊楠が「夢」に特別な関心を示し始め、また「南方マンダラ」を構想していた頃、華嚴思想の綱要書である『華嚴五教章』を熱心に読んでいたことが明らかにされた[唐澤2015:191-212]。特に、熊楠の言う「理不思議」と華嚴思想における「理事無礙法界」(=「現実世界」と根源的な場との区別が極めて不鮮明になり相互浸透するような場)および「事事無礙法界」(=事物と事物とかが自性を保ちつつも相即即入する場)との概念的類似性は非常に重要である。つまり、熊楠の「夢」研究において、華嚴思想は決して無視することはできないものなのである。

「夢」と華嚴思想を考える際に、欠かすことができない人物が、鎌倉時代の華嚴僧・明恵高弁(1173~1232年)である。明恵は、「夢」を通じて「内的体験に主体的に取り組んだ世界で最初の一人」[河合1987:14]とも言われる。洋の東西を問わず、古来「夢」は非常に神聖視されてきた。しかし、日本において「夢」を生涯にわたって記録し続けた人物は、明恵より前の時代にはそう簡単には見出すことはできない。一方、明恵以後、特に近代日本において「夢日記」をつけていた偉人は多くいるが、その行為を通じて「内的体験」を探求し続けた人物は、極めて稀有である。そのような中、熊楠は「夢」とともに、自分自身の精神変容の様子や、それに対する自身の考察を詳細に記録し、後世に伝えている。

熊楠と明恵という二人の天才が「夢」をどのように捉え、さらに「夢」による「意味のある偶然の一致」すなわちシンクロニシティをどのように考えていたかを、両者に絶大な影響を与えた華嚴思想を軸に見ていくことは、(「2. 研究の目的」で述べるように)ロゴスの思考を超えた本源的な知性の在り方を深く知る手がかりになるのではないだろうか。

## 2. 研究の目的

端的に、本研究では、熊楠と明恵に見られる思想的通奏低音、つまり彼らが生涯「夢」を通じて何を見出そうとしていたのかを明らかにすることを目的とする。そのために、上の「1. 研究開始当初の背景」でも述べた「データベース」を再度、精査し、補完作業を行うことを当初の目的とした。さらに、明恵の「夢」に関する記述も調査する。両者の「夢」に関する言説を踏まえた上で、現在の科学におけるベースとなっている「論理的思考」の三原則(同一律・矛盾律・排中律)あるいは数量的思考を超えた知のパスpekティブを提示することを最終目標とする。本研究では、その提示において、両者が重視した華嚴思想を軸として考察していくことを試みた。

熊楠と明恵は、しばしば、いわゆるシンクロニシティを経験しているが、その背景にあるものとは何か(例えば、熊楠の日記・書簡・論考を見ると、彼が頻繁に「夢告」を受けて珍しい植物などを「やりあて」たことを知ることができる。また、明恵も同じように「夢告」や瞑想において感得した事柄をしばしば的中させていることが『伝記』などから知ることができる)。熊楠と明恵、両者が経験した共時的現象=「やりあて」には、どのような共通点が見られるのか。本研究では、『南方熊楠日記』(あるいは『南方熊楠全集』)や『明恵上人夢記訳注』[奥田他2015]などから、両者の言説を抽出し考察した。また、華嚴思想に特徴的な「無礙」の考え方は、この「やりあて」には欠くことができないものだと思われる。「無礙」とは、礙げが無い状態、つまり自己と他者との間に、強固な「区別」や「壁」が無くなった状態である。「やりあて」においては、自己は他者へ深く入り込み、あるいは他者は自己へと深く入り込まなければならない。か

ろうじて自我を保ちながらも、この「壁」を超えたときにこそ、交感的な経験の感得は可能になる。これこそ、まさに華嚴思想の説く「事事無礙法界」の在り方でもある。

### 3. 研究の方法

- 1) 筆者は、上記「1. 研究開始当初の背景」でも述べた「データベース」を作成したが、これは、2010年3月のものであり、それ以降も南方の資料研究は、申請者も所属する南方熊楠翻字の会で着々と進んでいる。本研究の大前提として、まずは、南方熊楠顕彰館（和歌山県田辺市）が所蔵している熊楠の日記の原本およびマイクロフィルムを、直接現地で調査を行う。刊行されている『南方熊楠日記』において、熊楠直筆の図のいくつかが何故か削除されていることがある。特にいわゆる「那智隠栖期」と呼ばれる時期のそれらは、熊楠の「夢思考」を知る上で欠くことはできないものなので、詳細に調査を行う。
- 2) 次に、明恵は、熊楠同様 夢 において、様々な共時的な出来事を経験しているが、この共時的現象の起こり得る場と、華嚴思想の言う「理事無礙法界」「事事無礙法界」とはどのような関係があるのかを、明恵の 夢 をリスト化することで考察していく。
- 3) 熊楠が共時的現象をどのように捉えていたか、彼の 夢 あるいは幽霊などに関する記述を精査する。特に「那智隠栖期」におけるナギラン (*Cymbidium nagifolium*) という珍しい植物をどのように発見したか、その経緯を明らかにする。ナギランのいわゆる「やりあて」に関する記述をリスト化し、熊楠が共時的現象にどのような姿勢（スタンス）を持っていたかを明らかにしていく。
- 4) 上記研究成果を随時、論文として発表し、そこには可能な限り「データベース」を補完するためのリストを併記していくことにする。

### 4. 研究成果

#### 2018年度

南方熊楠顕彰館で、直筆日記の調査を中心に行った。特に、「那智隠栖期」の1904年4月25日付日記に記された、熊楠による自己乖離のイメージ図（いわゆる「幽体離脱 Out-of-body experience (OBE)」の図）を撮影し、再度そこに記された説明文を精査し、熊楠による独特な時間と空間に対する感覚について考察した。そして、この経験を踏まえた熊楠による時間と空間に関する議論は、「一瞬の内に全てが収まる」という華嚴思想に深く通ずるものであることがわかった。その成果は、論文「聖地那智山における表象 南方熊楠の体験から」として発表した[唐澤 2019a : 28-31]。この熊楠による OBE の図は、これまで『全集』『日記』などには未収録だったものである。本論文の中では、この熊楠による三次元的空間を超えて知覚した不可思議な表象に関する記述が、「通常」の我々の認識における自己と「世界」との在り方に対して根本的な疑問を呈するものであることを示した。

その他、龍谷大学内で月1回の割合で華嚴研究会を主催し、夢 と華嚴思想との関わりについて考察を深めた。2019年2月には、ジュンク堂池袋本店で公開研究会（「華嚴思想と夢 「現実」を開くわざ」）を開催し、「脳力」と夢 熊楠の言説に見る華嚴的パースペクティブ」と題する発表を行った。「脳力」とは熊楠による造語である。それは、簡単に言うならば、特別な集中力によって「妙なつながり」を見出す力のことである。熊楠は、この強烈な「脳力」によって、普通は対立したり全く無関係に見えたりする事柄同士の本質的な「つながり」に気づくことができた。熊楠の記述などからは、彼がそのような本質的な「つながり」が見える深い次元に入りこんでいたことがよくわかる。一方、彼は、その次元に留まることなく、そこ「現実世界」とを常に往還していたことも重要な点である。

論文「南方熊楠が夢や幻の探求を通じて目指していたこと アイスバーグモデルを参照にしながら」[唐澤 2019b : 39-55]では、C.G.ユングの思想を参照にしながら、熊楠が、夢 や幻の探求を通じて（また仏教用語とその概念を用いながら）人類の精神の深層構造に迫ろうとしていたことを論じた。熊楠は、「名」や「印」そして「縁」などという仏教用語を用いながら、人間の精神の深層構造に迫ろうとしたのである。彼は、自身の普段の 夢 の探求を通じて、「個人的無意識」の在り方を知り、自身にもしばしば生じた幽幻な事象を通じて、「個人的無意識」よりさらに深い領域があることを知り探求していた。さらに、その「無」に最も近い領域における、無分別的全体運動とその構造の解明こそ、熊楠が 夢 の探求を通じて究極的に目指していた事柄であったことを示した。端的に、それは「縁」の在り方の解明である。熊楠の 夢 研究の背後には、「縁」の探求があったのである。本論文では、通常の時空間を超えた非リニアな「縁」を捉えること、これこそ熊楠が目論んだことでもあり、また現在の我々に課せられた大きな課題でもあることを論じた。

他には、熊楠による「熊楠の生命の樹」呼ばれる図像とカバラにおけるセフィロトの樹のそれぞれのエレメントについて比較構造分析を行った（論文「南方熊楠は「猶太教の密教の曼陀羅」で何を表現しようとしたか セフィロトの樹との比較」[唐澤 2019c : 109-117]）。これまで、似ているとのみ評されてきた両者の図であるが、本研究によって彼はセフィロトの樹の図の形だけではなく個々の要素の内容も踏襲していたとわかった。ただし、「熊楠の生命の樹」の要素がセフィロトの樹における各セフィラーと全て完全に一致しているわけではなく、そこには熊楠の独自性もかなり見られた。また、熊楠がこの図の構想において参照した H.P.ブラヴァツキー（1831～1891年）の『ヴェールを剥がされたイシス』では、セフィロトの樹の右側を男性原

理、左側を女性原理としているのに対して、熊楠は右側を物質性、左側を精神性としている点も独特である。このような相違は、熊楠によるセフィロトの樹の理解不足から生じたものなのか、理解した上でのカスタマイズなのか。あるいは、『ヴェールを剥がされたイシス』以外の著作からの影響なのか。判断材料は未だ不足していると言わざるを得ない。今後、日記、蔵書のみならず、彼が長年講読していた *Nature* や *Notes and Queries* 等の雑誌記事も調査する必要がある。

### 2019 年度

明恵の夢には、非常に多彩な動物が登場する。しかし、それらを網羅的に捉え言及した研究はこれまでなかった。明恵の動物観あるいは非-人間への眼差しを知る上で、彼が見た動物の夢は大きなヒントを与えてくれる。同時に我々は、その眼差しが華嚴思想(特に事事無礙法界)と深くリンクすることを知ることができる。論文「明恵の夢における動物の意味」[唐澤 2020: 93-105]では、まず、現在までに活字化され刊行されている明恵による夢の記録を概観し、そこから動物に関する夢を抽出しリスト化した。その上で、彼の夢に登場する動物の傾向を考察した。さらに、それらの動物が、明恵にとってどのような「意味」を持つものだったのかを論じた。最後に、明恵が経験した動物をめぐる共時的現象と華嚴思想とのつながりについて述べた。言葉や論理を突破して、明恵は、自身と非-人間との間に、相互浸透性を持っていたとも言える。そして明恵は、言葉や時間や空間といった人間を縛り付けている事柄を相対化し、ロゴスを超えた深いつながりの次元に入り込むことができたからこそ、共時的なヴィジョンを見ることができたことを論じた。また本論文では、明恵による動物にまつわる夢を通じた共時的現象も考察した。夢は、膨大な時間の流れを刹那に収める。また、空間を自在に伸縮させる。さらに、種の壁を超えてコミュニケーションを成立せしめる。そのような意味において、夢という現象は、極めて華嚴的であるとも言えるのである。つまり、華嚴僧明恵による動物の夢は、事事無礙法界(華嚴的真実)を最もわかりやすい形でヴィジュアル化したものとも言えるということ結論として導き出した。

また、2020年2月9日にはユング派分析家協会にて「南方熊楠の夢研究」と題して、研究発表を行なった。熊楠の言説から、彼が通常の因果関係を超えた非リニアな「縁」という力そのものについて探求していたことを明らかにし、さらに一つの事柄の中に多数が映発する、いわば一即多、多即一という関係について思索を巡らせていたことを発表した。

### 2020 年度

熊楠は、書簡及び論考内で、夢や幽霊の知らせによってナギランという珍しい植物を数度発見したことを述べている。言わば、熊楠はナギランを「やりあて」ていたのである。論文「南方熊楠によるナギランの発見」[唐澤 2021a: 69-89]では、熊楠によるナギランの「やりあて」をめぐる、彼による共時的現象の捉え方を考察した。

本論文では、粘菌や隠花植物の研究者としても著名な熊楠が、どのような経緯でナギランに関心を持ち始め、またその際どのような書籍を参照していたかについて、彼と親交の深かった小畔四郎(1875~1951年)へ宛てた書簡から考察した。そして、それらの発見方法と発見株数に関して、彼の日記・書簡・論考それぞれの媒体で、どのような記述の違いがあるか、リストとしてまとめた。また、ナギランを発見した前後、熊楠がどのような超常体験をしていたかを彼の言説から明らかにした。その上で、彼の共時的現象における基本的な姿勢とはどのようなものだったのかを論じた。本研究によって、熊楠が初めてナギランを発見したと思われる翌日、彼はOBEを経験していることがわかった(これは、2018年度に筆者が見出した彼による凶言説ともつながってくる)。また、2回目の発見日と思われる日の夜には、エントプティック(暗闇において光が見える「内部視覚」現象)を経験している。3回目の発見と思われる日の9日後には、父の幽霊を見ている。「それぞれに因果関係はない」と言えば、そこで全てがクローズする。しかしながら、非因果的連関作用=シンクロニシティの概念においては、超常体験 ナギランの発見という直線的時間も当然無化されるし、ナギランの発見後にパラノーマルな体験をしたり、それらが同時に(同期的に)認識されたりすることもあり得る。少なくとも彼は、ナギランの連続的発見に強烈な「意味」を見出していたことは間違いない。

熊楠は、もし我々が、現在の科学におけるベースとなっている「論理的思考」の三原則(同一律・矛盾律・排中律)や数量的思考を取り払って物事を見ることができれば、そこにはまざまざと「心の世界」が顕現すると述べている。この言説は、華嚴思想の、あるいは中沢新一の言う「レンマ」的知性[中沢 2019]にも深く関わるものである。

### 今後の展望

筆者はここまで来て、これまで研究を通じて、夢と華嚴思想に見られる「在り方」が、極めて粘菌(変形菌)的であることに気づいた。それは、熊楠が「那智隠栖期」に非常に熱心に採集観察していた生物である。そもそも、「南方マンダラ」の形状自体が、粘菌の変形体の形と酷似しているのである。熊楠は、この時期、日記にほぼ毎日のように「変形菌三」「変形菌十三」などと、採集した粘菌の数を記録している。また、「南方マンダラ」が記されたのは1903年7月

18日だが、この7月は、1年の内で変形体が最も活発に動く季節である。では、なぜ熊楠が「南方マンガラ」を記した際に、粘菌について触れなかったのか。書簡の相手の土宜法龍が生物学者ではなかったからか。それとも、粘菌は既に熊楠の中で咀嚼されつくしていたからこそ敢えて語らなかったのか。これらについては、今後研究を行なっていく必要がある。

熊楠の思考と粘菌との関係を考察する一端として、粘菌とアートの研究を行なっているアーティスト齋藤帆奈との講演会「熊楠と粘菌、アート 私たちは生態系の調整者から何を学ぶのか」(アッシュ・ペー・フランス rooms41「rooms Academy」2020年10月)を行い、また、秋田公立美術大学大学院複合芸術会議2021vol.2「粘菌の視座」で、熊楠の華嚴的思考の背景にあった粘菌の哲学的側面について触れた。

粘菌の構造は、多核単細胞である。つまりアメーバという単細胞に無数の核が含まれているのである。それは、一つの細胞に無数の核が含まれているという意味で、まさに「一にして多」「多にして一」という華嚴的真理を地でいく生物とも言えるだろう。動物と隠花植物両方の性質を持つ粘菌は、矛盾・対立を同時に在らしめる存在でもあり、その意味において「夢」の在り方とも共通する部分が多い。今後、筆者はこれまでの研究をもとにしながら、まず、華嚴思想のエッセンスを十の項目にまとめた「十玄縁起」と粘菌の生態の比較を行う予定である。さらに明恵が非-人間(動物)との関係を「夢」を通じて深く思考していたのと同じように、熊楠が、粘菌を軸としながら人間と非-人間との関係をどのように思考していたのかを、マルチスピーシーズ人類学と絡めながら考察していく予定である。そのスタートとして、これまでの研究を基礎とした、熊楠と粘菌に関する論文「粘菌鏡検 南方熊楠による「世界一般」への潜入」[唐澤2021b: 285-304]を執筆した。本論文では、熊楠が、粘菌という、我々の「通常」の、あるいは「常識的」な枠をはめることができる世界(華嚴思想的に言うならば「事法界」)から見事にはみ出している生物を「詩的言語」によって捉え、根源的な場へ帰還してしまうという「無への不安」に耐えながら、美しくも妖しい「霊性の世界」あるいは「華嚴的真理」を見出していたことを論じた。本研究で作成したリストを振り返りつつ、今後も引き続き、この華嚴思想と「夢」そして粘菌の深層構造について研究していく予定である。

## 参考文献

- 奥田勲・平野多恵・前川健一編『明恵上人夢記 訳注』勉誠出版2015年  
唐澤太輔『南方熊楠の見た夢 パサージュに立つ者』勉誠出版2014年  
唐澤太輔「南方曼陀羅」と『華嚴経』の接点』『龍谷大学世界仏教文化研究センター2015年度研究活動報告書』龍谷大学2016年  
唐澤太輔「聖地那智山における表象 南方熊楠の体験から」『世界仏教文化研究論叢』第57集、龍谷大学2019年(唐澤2019a)  
唐澤太輔「南方熊楠が夢や幻の探求を通じて目指していたこと アイスバーグモデルを参照しながら」『「エコ・フィロソフィ」研究』第13号、東洋大学2019年(唐澤2019b)  
唐澤太輔「南方熊楠は「猶太教の密教の曼陀羅」で何を表現しようとしたか セフィロトの樹との比較」『比較思想研究』45号、比較思想学会2019年(唐澤2019c)  
唐澤太輔「明恵の夢における動物の意味」『「エコ・フィロソフィ」研究』第14号、東洋大学2020年  
唐澤太輔「南方熊楠によるナギランの発見」『「エコ・フィロソフィ」研究』第15a号、東洋大学2021年(唐澤2021a)  
唐澤太輔「粘菌鏡検 南方熊楠による「世界一般」への潜入」石井美保・岩城卓二・田中祐理子・藤原辰史編『環世界の人文科学 生と創造の探求』人文書院2021年(唐澤2021b)  
河合隼雄『明恵 夢を生きる』京都松柏社1987年  
高山寺典籍文書総合調査団(代表者 築島裕)編『明恵上人資料第一』(「梅尾明恵上人伝記」収録)東京大学出版1971年  
高山寺典籍文書総合調査団(代表者 築島裕)編『明恵上人資料第二』(「明恵上人夢記 高山寺蔵」収録)東京大学出版1978年  
中沢新一『レンマ学』講談社2019年  
南方熊楠『南方熊楠全集 1~10巻、別巻 1、2』平凡社1971~1975年  
南方熊楠『南方熊楠日記 1~4巻』八坂書房1987~1989年  
南方熊楠・土宜法竜著『南方熊楠 土宜法龍 往復書簡』八坂書房1990年  
南方熊楠『高山寺蔵 南方熊楠書翰 土宜法龍宛 1893-1922』藤原書店2010年

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 唐澤太輔	4. 巻 無
2. 論文標題 虚空と風 - 南方熊楠の「場所」をめぐって -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 哲学の戦場	6. 最初と最後の頁 279-317
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 唐澤太輔	4. 巻 45
2. 論文標題 南方熊楠は「猶太教の密教の曼陀羅」で何を表現しようとしたか セフィロトの樹との比較	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較思想	6. 最初と最後の頁 109-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 唐澤太輔	4. 巻 13
2. 論文標題 南方熊楠が夢や幻の探求を通じて目指していたこと - アイスバーグモデルを参照にしながら -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 「エコ・フィロソフィ」研究	6. 最初と最後の頁 39-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 唐澤太輔	4. 巻 57
2. 論文標題 聖地那智山における表象 - 南方熊楠の体験から -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 世界仏教文化研究論叢	6. 最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 唐澤太輔	4. 巻 14
2. 論文標題 明恵の夢における動物の意味	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 「エコ・フィロソフィ」研究	6. 最初と最後の頁 93-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 唐澤太輔	4. 巻 15
2. 論文標題 南方熊楠によるナギランの発見	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 「エコ・フィロソフィ」研究	6. 最初と最後の頁 69-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 唐澤太輔	4. 巻 無
2. 論文標題 粘菌鏡検 - 南方熊楠による「世界一般」への潜入 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 環世界の人文学 - 生と創造の探究 -	6. 最初と最後の頁 285-304
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 唐澤太輔
2. 発表標題 南方熊楠は「猶太教の曼陀羅」で何を表現しようとしたか - セフィロトの樹との比較 -
3. 学会等名 比較思想学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 唐澤太輔
2. 発表標題 南方熊楠の夢思考～開かれる全体性～
3. 学会等名 ダーウィンルーム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 唐澤太輔
2. 発表標題 南方熊楠の夢思考II～死者との対面～
3. 学会等名 ダーウィンルーム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 唐澤太輔
2. 発表標題 夢と創造性：南方熊楠の超域的パースペクティブから
3. 学会等名 秋田公立美術大学大学院博士課程開学記念シンポジウム【複合芸術会議2018：仙台セッション】「トランスローカルの想像力：越境する知とアートの方法論」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 唐澤太輔
2. 発表標題 粘菌と不安 - 南方熊楠の「在り方」と生命観へのアプローチ -
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所「生と創造の探究 - 環世界の人文科学 - 」例会（招待講演）
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 唐澤太輔
2. 発表標題 粘菌と南方熊楠
3. 学会等名 Klub Zukunft (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 唐澤太輔
2. 発表標題 「脳力」と夢 - 熊楠の言説に見る華嚴的パースペクティブ -
3. 学会等名 華嚴研究グループ公開研究会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 唐澤太輔
2. 発表標題 南方熊楠の夢思考 ~ 「幽幻の事相」の先へ~
3. 学会等名 ダーウィンルーム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 唐澤太輔
2. 発表標題 南方熊楠の夢研究
3. 学会等名 一般社団法人 日本ユング派分析家協会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 唐澤太輔
2. 発表標題 南方熊楠の粘菌研究
3. 学会等名 アッシュ・ペー・フランス rooms41「rooms Academy」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 唐澤太輔
2. 発表標題 粘菌研究クラブについて
3. 学会等名 秋田公立美術大学大学院複合芸術会議2021vol.2「粘菌の視座」(招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------